

クロアチア近代史と地域史的視点——新たな歴史教科書の分析から——

石田信一

はじめに

かつてユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国を構成し、一九九〇年代初頭に激しい紛争を経て分離・独立したクロアチアとセルビアでは、長らく歴史教育において和解を妨げる対立的な認識の存在が問題視されてきた^①。両国ともに紛争を推進してきた指導者とその所属政党が二〇〇〇年代初頭に下野したこともあってか^②、両国の歴史教科書に見られた民族主義的傾向は総じて抑制的なものとなり、かつての国定教科書としての側面も徐々に薄れていった^③。歴史教育をめぐる二国間あるいは近隣の南東欧（バルカン）諸国を含む多国間の取り組みが進行していたこともその背景にあると考えられる^④。

現在、クロアチアとセルビアでは新たなカリキュラムに基づく歴史教科書が順次導入されているが、とくにクロアチアの場合、二〇一六年に発足した中道右派政権が推進したカリキュラム改革案に対

しては、当初から一九九〇年代に逆行するような民族主義的傾向の復活を危惧する声があがっていた^⑤。それでも、この新たなカリキュラムは二〇一九年に小学校五年生と中学校一年生で、また二〇二〇年に小学校六・七年生と中学校二・三年生で導入され、二〇二一年に残りの小学校八年生と中学校四年生で導入される予定となっている^⑥。

本稿の目的は、クロアチアで二〇二〇年に刊行された新たな小学校七年生向けの歴史教科書の記述をそれ以前のものと比較しつつ、それらに取り入れられている地域史的視点を分析することにある^⑦。一九九〇年代以降、クロアチアの歴史教科書がクロアチア史を南東欧ではなく中欧あるいは広くヨーロッパ史の中に積極的に位置づけようとする一方、その内容が旧ユーゴスラヴィア諸国・諸民族の歴史をほとんど無視し、敵対的な場面だけで登場させるようなものであったことは大いに問題であった。クロアチアの歴史教育の専門家であるスニエジナ・コレンは、この状況について「南スラヴ諸民

族に割り当てられていた箇所が、教科書からもカリキュラムからも「減少」する一方、「事実無根の否定的解釈が放置されるというケースがしばしば見られ」、「一般に流布した否定的イメージの強化が促進された」と指摘している。二〇二〇年に刊行された教科書に、危惧されていたような民族主義的傾向、とくにかつて問題視されたセルビア人をはじめとする近隣諸民族との対立を助長するような記述は残されているのかといった点に着目しつつ、その根幹にある「クロアチア中心主義史観」を相対化しうる地域史的視点は取り入れられているのか、検証していく。

なお、本稿は令和二(二〇二〇)年度跡見学園女子大学特別研究助成費(研究課題「旧ユーゴスラヴィア諸国における歴史教科書の比較研究」)による研究成果の一部である。⁸⁾

1. クロアチアにおける歴史教科書の特徴

ユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国時代にはすべての共和国・自治州で八年制の小学校(義務教育)と三〜四年制の中学校が標準的であったが、連邦解体後、多くの国々が九年制の小学校へと移行する中で、クロアチアはセルビアと並んで例外的に八年制の小学校を維持してきた。また、クロアチアにおける中学校には、四年制のギムナジウムのほか、三〜五年制の職業専門学校、四年制の芸術学校の区分があるが、これはコソヴォを除く旧ユーゴスラヴィア諸国にほぼ共通している。カリキュラム上、小学校五〜八年生、中学校

(ギムナジウム)一〜四年生でそれぞれ七〇時間(総合ギムナジウムでは九六時間)「歴史」の授業が必修とされている。⁹⁾日本のように日本史と世界史の区別はなく、時代順に一年目は古代史、二年目は中世・近世史、三年目は近代史、四年目は現代史(第一次世界大戦以降)を取り扱い、教科書は小学校・中学校ともに四分冊となっている。なお、中学校のうち職業専門学校では歴史教科書は四〜五年制の場合は二分冊、三年制の場合は一冊のみの簡便なものとなっている。

クロアチアでは長らくシユコルスカ・クニガ(Skolska knjiga)が歴史教科書出版をほぼ独占してきたが、一九九六年にアルファ(Alfa)、一九九八年にプロフィル・インターナショナル(Profil International)やビーロテフニカ(Brotelnika)が部分的に参入し、さらに二〇〇〇年以降はリエヴァク(Ujevak)やメリディヤニ(Meridijani)などがこれに加わるとともに、従来の教科書の大半が新版に変わった。

本稿で取り上げる近代史に関連する教科書は、小学校七年生向けのものと同中学校三年生向けのものである。二〇二〇年に科学・教育省の認可を受けて刊行された新たな歴史教科書として、前者にはアルファ、アルカ・スクリプト(Alka script)、プロフィル・クレット(Profil-Klet)、シユコルスカ・クニガの四社四種類、後者にはアルファ、メリディヤニ、プロフィル・クレット、シユコルスカ・クニガの四社四種類がある。¹⁰⁾新課程に移行済みの他の学年(小学校五〜六年生および中学校一〜二年生)でも、それぞれまったく同じ四社

四種類の教科書が刊行されている。なお、前回の教科書の新規採択は二〇一四年に行われたが、その際に認可されていた歴史教科書のうち、執筆者が同一のものは二〇〇七年に初版が出たシュコルスカ・クニガの小学校七年生向けの教科書（エルデリヤとストヤコヴィチの共著）だけである。新規参入となったアルカ・スクリプトを別にしても、ほとんどの出版社が執筆者をほぼ全面的に交代させ、まったく新しいシリーズを刊行したことが注目される。二〇一九年に採択された新しいカリキュラムにおいて、それまで別々に組み立てられていた小学校と中学校のカリキュラムが一体化されたことも、その要因の一つと考えられる。小学校七年生向けおよび中学校三年生向けの歴史教科書の範囲は初めてほぼ同一のものとなり、とくに中学校向けのものは小学校向けのものにあわせて大がかりな改訂を余儀なくされたからである。例えば、小学校七年生と同じく中学校三年生でも「第一次世界大戦」を取り扱うようになっている（従来、「第一次世界大戦」は中学校四年生の範囲であった）。

クローアチアの歴史教科書の特徴の一つとして、前述の通り四分冊となっており、かなりの分量があることが挙げられる。ほぼ継続性があると言ってよいシュコルスカ・クニガの小学校七年生向けの歴史教科書を見ると、二〇〇〇年版では一四五頁、二〇〇七年版では二二一頁と大幅に分量が増えていたが、二〇一四年版では二〇一頁、さらに二〇二〇年版では一七六頁に減少している。その背景には教科書の重量（＝児童生徒の負担）を批判する世論の高まりから軽量化がはかられたことに加え、デジタル教材の併用を前提とするよう

になったことが挙げられる。もともと、中学校三年生向けの歴史教科書に関して言えば、もつとも薄いシュコルスカ・クニガの教科書で二四〇頁、約五二二グラム、もつとも厚いメリディヤニの教科書で三二七頁、七二〇グラムと必ずしも軽量化が進んでいるわけではない。前者は縦二八センチ、横二〇センチ、後者は縦二八センチ、横二一センチで、多くの教科書がそれと大きく変わらないサイズである（日本のものと比べても重くて大きい）。

二〇〇〇年代以降の教科書は写真、地図、史料などの図版が多用されていることも、大きな特徴と言える。もとより当該項目にあてている頁数が大きく異なるとはいえ、日本のある高校向け世界史教科書が「第一次世界大戦」に地図二点とその他の図版八点を掲載しているのに対して、クローアチアのシュコルスカ・クニガ刊行の中学校三年生向け歴史教科書は同じ箇所地図七点、その他の図版四〇点を掲載している。一九九〇年代後半の教科書が掲載していたのが地図三点、その他の図版二点であったことと比べても、かなり増えていることわかる¹⁴⁾。

全般的な傾向として、一九九〇年代の教科書では政治史・軍事史に関する記述が大半を占め、世界史や地域史よりもクローアチア史に関する記述が多かったことに対して、二〇〇〇年代の教科書では文化・社会・経済史に関する記述が増え、世界史とクローアチア史の記述のバランスも逆転しており、こうした傾向は二〇一九年のカリキュラムに準拠した教科書でも維持されていると考えられる¹⁵⁾。

2. 新たなカリキュラムと歴史教科書における近代史

二〇一九年に採択された新たなカリキュラムにおいて、「歴史」は五つの分野、すなわち①社会、②経済、③科学・技術、④政治、⑤哲学・宗教・文化に区分され、それぞれをクロアチア史、ヨーロッパ史、世界史の文脈で学ぶこととされている。また、各学年に一六の必修テーマと二つの選択テーマが課されていることも大きな特徴である。ここでは、まず小学校七年生向けの「歴史」の必修テーマと選択テーマについて確認しておく。なお、中学校三年生向けのものは、時代的な範囲はほぼ重なるものの、個々のテーマが異なることは言うまでもない。

【必修テーマ】

- ①社会分野：「宮廷・啓蒙絶対主義時代のクロアチア諸邦」、「クロアチア諸邦におけるフランス統治、クロアチア民族再生—イリア運動」、「産業革命—都市の発展と労働者問題—クロアチアの工業化」、「近代クロアチアの基礎—クロアチア市民社会の建設」。

- ②経済分野：「産業革命—都市の発展」、「クロアチアの工業化」、「一九世紀から二〇世紀への転換期の経済・人口の変化」。
- ③科学・技術分野：「科学・技術の勝利とその資本主義への適用」、「軍事的・政治的同盟と各国の関係」。

- ④政治分野：「アメリカ独立戦争、フランス革命、ナポレオン時代」、「一八四八/四九年革命、国民と国民国家の形成」、「ハプスブルク帝国とクロアチア諸邦における十月勅書から第一次世界大戦までの議会活動」、「第一次世界大戦、ヨーロッパにおける国境の修正」。

- ⑤哲学・宗教・文化分野：「啓蒙主義の時代」、「一九世紀のイデオロギーとクロアチア国民形成」、「近代の芸術—絵画、音楽、文学」。

【選択テーマ】

- ①「新たな国家・社会思想—独立宣言、人権宣言、女性と市民の権利に関する宣言」、「郷土史から見た第一次世界大戦」。
- ②「蒸気機関の工業と交通への影響」、「郷土史から見た産業革命の影響」。
- ③「八〇日間世界一周」、「アフリカとオーストラリアの探検」。
- ④「民族再生の時代—郷土史の事例」、「二〇世紀初頭の国際的危機と地域的戦争」。
- ⑤「スポーツとオリンピック運動の発展」、「学校制度の発展—郷土史の事例」。

カリキュラムで示されたテーマは分野別に並べられていることもあり、実際の教科書の章立てとは一致していないが、当然ながら対応関係がある。教科書にも、どの分野のテーマであるかが明記されている。

例えば、シユコルスカ・クニガの小学校七年生向けの歴史教科書（前掲）は項目数が非常に多く、目次にはどの分野のテーマか示されていないが、各項目には分野が記載されている。各項目とその分野は次の通りである（便宜的に教科書にはない通し番号をつけている）。

（1）啓蒙主義、啓蒙絶対主義（①啓蒙主義の時代（哲学・宗教・文化分野）、②啓蒙絶対主義（社会分野）、③啓蒙絶対主義時代のクロアチア諸邦（社会分野））。

（2）革命と民族運動（①アメリカ独立戦争（政治分野）、②一九世紀のアメリカ合衆国の拡大（政治分野、社会分野）、③フランス革命…原因と開始（政治分野、社会分野）、④フランス革命…共和国から恐怖政治へ（社会分野、政治分野）、⑤ナポレオン時代（社会分野、政治分野）、⑥フランス統治下のクロアチア諸邦（社会分野）、⑦一九世紀のイデオロギー（哲学・宗教・文化分野）、⑧国民意識…クロアチア民族再生—イリリア運動（哲学・宗教・文化分野）、⑨ダルマチアとイストリアの民族再生（政治分野、哲学・宗教・文化分野）、⑩ヨーロッパにおける一八四八／四九年革命（政治分野）、⑪クロアチアにおける一八四八／四九年革命（政治分野）、⑫国民国家の建設—イタリアの事例（政治分野）、⑬国民国家の建設—ドイツの事例（政治分野））。

（3）経済的・社会的発展（①第一次産業革命（経済分野、科学・技術分野）、②第二次産業革命（社会分野、経済分野、科学・技術分野）、③科学の進歩と社会の変化（科学・技術分野、社会分野））。

④都市の発展と労働者問題（社会分野、経済分野）、⑤クロアチアの工業化（経済分野）、⑥一九世紀から二〇世紀への転換期の経済的・社会的変化（社会分野、経済分野）、⑦ロマン主義（哲学・宗教・文化分野）、⑧一九世紀後半と二〇世紀初頭の芸術の潮流と大衆文化（哲学・宗教・文化分野））。

（4）一九世紀後半と二〇世紀初頭の政治的關係（①新絶対主義と一八六一年のクロアチア議会（政治分野）、②クロアチア—ハンガリー協定（政治分野）、③イヴァン・マジユラニチ総督（政治分野）、④一九世紀から二〇世紀への転換期のクロアチア（政治分野）、⑤植民地主義（政治分野、経済分野）⑥軍事的・政治的同盟と各国の關係（政治分野）、⑦第一次世界大戦…原因と契機（政治分野）、⑧第一次世界大戦…戦争の初期（政治分野）、⑨第一次世界大戦…終戦（政治分野、社会分野）、⑩第一次世界大戦中のクロアチア（哲学・宗教・文化分野））。

このほか、四つの選択テーマ（「オーストラリアとアフリカの探検」、「スポーツとオリンピック運動の発展」、「クロアチア国外のクロアチア人の再生とクロアチアにおける少数民族の再生」、「二〇世紀初頭の国際的危機と地域的戦争」）が設けられているが、教科書そのものに記述はなく、デジタル教材を活用することになっている。シユコルスカ・クニガの教科書の特徴として、各項目が五分野の

いずれかと厳密には対応せず、二／三分野にまたがる項目もあることが注目される。また、カリキュラムでは科学・技術分野に位置づけられている軍事・政治的同盟と各国の關係」がこの教科書では政

治分野に位置づけられていることも興味深い。

一方、プロフィル・クレットの小学校七年生向けの歴史教科書の章立ては、①啓蒙主義の時代（宗教・文化分野）、②市民革命の時代（政治分野）、③産業革命の時代（社会分野）、④科学・技術の勝利とその資本主義への適用（科学・技術分野）、⑤都市の発展（政治分野）、⑥一九世紀のイデオロギー（宗教・文化分野）、⑦啓蒙絶対主義時代のクロアチア諸邦（社会分野）、⑧一九世紀前半のクロアチア諸邦（社会分野）、⑨国民と国民国家の形成（政治分野）、⑩第一次世界大戦開戦までのハプスブルク帝国における議会活動（政治分野）、⑪クロアチア市民社会の建設（社会分野）、⑫クロアチア諸邦の工業化（経済分野）、⑬一九世紀から二〇世紀への転換期の経済・人口の変化（経済分野）、⑭軍事・政治的同盟と各国の関係（科学・技術分野）、⑮第一次世界大戦（政治分野）、⑯第一次世界大戦のクロアチア地域への反映（選択テーマ）、⑰スポーツとオリンピック運動の発展（選択テーマ）、⑱近代の芸術（宗教・文化分野）となっている。この章立て自体は、シユコルカ・クニガのものに比べて、カリキュラムに忠実であるといえる。

また、アルカ・スクリプトの学校七年生向けの歴史教科書の章立ては、(1)一八世紀と一九世紀初頭のヨーロッパ（①啓蒙主義と啓蒙絶対主義の時代（哲学・宗教・文化分野）、②啓蒙絶対主義時代のクロアチア諸邦（社会分野、哲学・宗教・文化分野）、③アメリカ合衆国の建国（政治分野）、④第一次産業革命（科学・技術分野、哲学・宗教・文化分野）、⑤フランス革命（政治分野）、⑥ナポレオ

ン時代（政治分野）、⑦フランス統治下のクロアチア諸邦（社会分野）、(2)一九世紀のイデオロギーと近代的国民の形成（①一九世紀のイデオロギー（哲学・宗教・文化分野）、②クロアチア民族再生—イリリア運動（社会分野、政治分野、哲学・宗教・文化分野）、③一八四八／四九年革命—諸国民の春（政治分野）、④クロアチアにおける革命的な一八四八／四九年（政治分野）、(3)一九世紀後半のヨーロッパと世界（①一九世紀後半の東欧と南東欧（科学・技術分野、政治分野）、②一九世紀後半の中欧（科学・技術分野、政治分野）、③一九世紀後半の西欧（科学・技術分野）、④アメリカ合衆国—約束の地（経済分野）、⑤第二次産業革命（社会分野、経済分野、科学・技術分野）、⑥クロアチアの工業化（社会分野、経済分野）、⑦都市の発展と労働者問題（社会分野、経済分野、科学・技術分野）、⑧植民地主義で競うヨーロッパ諸国（科学・技術分野）、⑨一九世紀の文化と芸術（哲学・宗教・文化分野）、(4)一九世紀半ばから第一次世界大戦開戦までのクロアチアとハプスブルク帝国（①バッハの絶対主義時代のクロアチア（政治分野）、②統合か自治か—一八六〇年代のクロアチア問題（政治分野）、③ウィーンとベシウトの間（政治分野）、④イヴァン・マジュラニ総督（政治分野）、⑤クエンリッヘーデルヴァーリの時代（政治分野）、⑥一九〇〇年代のクロアチア（政治分野）、(5)大戦争中の世界（一九一四—一八年）（①世紀転換期の国家間関係（科学・技術分野、政治分野）、②第一次世界大戦（科学・技術分野、政治分野）、③大戦争の統後で（経済分野）、④第一次世界大戦中のクロアチア諸邦（政

治分野)、そして選択テーマ(①オパティヤ歴史散歩(社会分野、経済分野、科学・技術分野)、②いかにして渡米するか(社会分野、経済分野、科学・技術分野))となっている。シュコルスカ・クニガの教科書と同じく、各項目が五分野のいずれかと厳密には対応せず、むしろ二三分野にまたがる項目が多い。

3. 歴史教科書における地域史的視点(1)

続いて、冒頭に述べたように、二〇二〇年に刊行された教科書を参照しつつ、かつて問題視されたセルビア人をはじめとする近隣諸民族との対立を助長するような記述は残されているのかを分析するとともに、歴史教科書の根幹にあると考えられた「クロアチア中心主義史観」を相対化しうる地域史的視点は取り入れられているのかを検証したい。

ユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国時代、クロアチアの歴史教科書ではクロアチア史に重点が置かれていたとはいえ、同じユーゴスラヴィア国民であるクロアチア人以外のユーゴスラヴィア諸民族の歴史も詳しく取り上げられていた¹⁸⁾。それは南東欧の地域史としての側面を持つものでもあったと考えられる。南スラヴ統一国家としてのユーゴスラヴィアの形成を前提とした記述が目につき、とくに小学校七年生向けの歴史教科書には「第一次世界大戦までのユーゴスラヴィア理念と民族問題の展開」(全六頁¹⁹⁾)および「ユーゴスラヴィアの少数民族の民族運動と再生」(全六頁²⁰⁾)という章さえ設け

られていた。その結果、当該教科書に肖像画または肖像写真付きで掲載された人物は、セルビア人に限っても、セルビア出身またはセルビアを拠点としていたドシテイ・オブラドヴィイチ、ヴーク・カラジッチ、ジョルジェ・ペトロヴィイチ・カラジョルジェ、ミロシュ・オブレノヴィイチ、ミハイロ・オブレノヴィイチ、ミラン・オブレノヴィイチ、ペタル・カラジョルジェヴィイチ、スヴェトザル・マルコヴィイチ、デイミトリエ・トウツォヴィイチ、ステヴァン・モクラニヤツ、ニコラ・パシッチらのほか、クロアチア出身でボスニアで活躍したオメル・パシヤ(ミハイロ・ラタス)、同じくクロアチア出身で世界的に著名な発明家となったニコラ・テスラ、さらにヴォイヴォディナ出身またはヴォイヴォディナを拠点としていたヨシブ・ラヤチッチ、ステヴァン・スプリカツ、スヴェトザル・ミレティチ、ヨヴァン・ボシユコヴィイチ、ヴラダン・ジョルジェヴィイチ、ミラン・クウンジッチ、ヨヴァン・ヨヴァノヴィイチ・ズマイ、スヴェトザル・プリビチエヴィイチら、さらにボスニア・ヘルツェゴヴィナ出身のルカ・ヴカロヴィイチ、ストヤン・コヴァチエヴィイチ、ペタル・コチッチ、ヴァサ・ペラギッチ、ボグダン・ジェライッチ、ガブリロ・プリンツィブに至るまで相当な数に上っていた(厳密な意味でセルビア人であるかどうかには異論もある)。

しかし、クロアチアが一九九一年にユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国から分離・独立したこともあり、それ以降の歴史教科書は内容が一新されていた。ようやく独自のカリキュラムが確立された一九九〇年代後半の小学校七年生向けの歴史教科書には「一八世

紀末から一九世紀半ばまでのアルプス・バルカン地域」という章が設けられており(全八頁)、スロヴェニア諸邦、南ハンガリー、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、セルビアとモンテネグロに関する記述が見られるが、とくにセルビアに関しては「セルビア公国の大セルビア主義的政策」という見出しが掲げられ、その侵略主義・領土拡大主義を批判する内容となっていた。しかも、一九世紀後半以降のそれらの地域の歴史に関しては、ボスニア・ヘルツェゴヴィナだけが取り上げられ、それ以外は「発達した資本主義の世界(一九世紀後半)⁽²⁾」や「第二次世界大戦前の諸事件、バルカン戦争」といった世界史の重要事項の中でわずかに触れられるだけで、セルビアは第一次世界大戦の契機となったサライェヴォ事件(オーストリア帝位継承者フランツ・フェルディナント夫妻の暗殺)の元凶として位置づけられていた。地域史的視点があつたとしても、近隣諸国・諸民族との敵対関係を強調するものでしかなかったことは明らかである。前述のコレンは二〇〇〇年代の教科書改訂においても依然として「クロアチア中心主義史観を伴う」カリキュラムが障害となつて地域史的視点を取り入れることが困難であると指摘している。この時期に歴史教科書は多様化し、「クロアチア中心主義史観」も大いに改善されたものの、クロアチア史を旧ユーゴスラヴィア諸民族の歴史と関連づけるという形での地域史的視点が復活することはなかった。オーストリアあるいはハンガリーとの関係をはじめとして、クロアチア史を世界史、主にヨーロッパ史の中に積極的に位置づけようとしている面があるものの、断片的な記述が大半であり、地域

史的視点とみなしうるものではない。強いて言えば、この時期に補強された文化史に関連する記述においては、ヨーロッパにおける文芸思潮とクロアチアや他の旧ユーゴスラヴィア諸国の動向を結びつける試みがなされており、例えば二〇〇七年刊行のシユルスカ・クニガの小学校七年生向けの教科書には、ロマン主義の文脈でイリリア運動の担い手であるリュデヴィト・ガイ、イヴァン・ククリエヴィチ・サクツィンスキ、ペタル・プレラドヴィチ(セルビア系)、スタンコ・ヴラズ(スロヴェニア系)のほか、ハンガリーのペテール・シャーンドル、スロヴェニアのフランツェ・プレシエレンらの名前が挙がっている。⁽³⁾

それでも、二〇一九年まで使用されていたこのシユルスカ・クニガの教科書には、旧ユーゴスラヴィア諸国を含む南東ヨーロッパの歴史がある程度は取り上げられていた(以下、便宜的に通し番号をつけている)。具体的には、①オスマン帝国支配下のギリシアで独立戦争が起き、一八三二年に独立が国際的に承認されたこと、②オスマン帝国支配下のセルビアでジョルジュ・ペトロヴィチ(カラジョルジュ)が一八〇四年に起こした第一次セルビア蜂起、同じくミロシュ・オブレノヴィチが一八一五年に起こした第二次セルビア蜂起の結果、自治権を獲得したこと、③セルビアは大国に対抗するために領土の拡大を求めており、イリヤ・ガラシャニンが一八四四年に発表した大セルビアの建設をめざす『ナチュエルターニエ』がその指針であること、④一九世紀半ばにはセルビアの言語学者ヴーク・カラジッチがクロアチア人の大半が用いるシユト方言の話し手

をセルビア人とみなして論争が生じたこと、⑤一八七五年のボスニア・ヘルツェゴヴィナ蜂起を契機としてセルビア、モンテネグロ、ロシアがオスマン帝国と交戦し、一八七八年のベルリン会議でセルビア、モンテネグロ、ルーマニアの独立とオーストリア＝ハンガリーによるボスニア・ヘルツェゴヴィナの占領が国際的に承認される一方、サン・ステファノ条約で認められていた大ブルガリアの建設が破棄されたこと、⑥一九〇八年にオーストリア＝ハンガリーがボスニア・ヘルツェゴヴィナを併合したことで、同地への領土拡大をめざしていたセルビアの反発を買ったこと、⑦一九一二―一三年のバルカン戦争でまずギリシア、セルビア、モンテネグロ、ブルガリアがオスマン帝国と戦って勝利したが、さらに領土拡大をめざすブルガリアとセルビア、ギリシア、ルーマニア、モンテネグロ、オスマン帝国の間で戦争が起こり、ブルガリアが大敗したこと、⑧一九一四年にセルビアと結びついたガヴリロ・プリンツィプがオーストリア帝位継承者フランツ・フェルディナント夫妻を銃撃・暗殺したサライェヴォ事件を契機にオーストリア＝ハンガリーがセルビアに最後通牒を突き付け、セルビアがこれを拒否したことで第一次世界大戦が勃発したこと、⑨一九一五年にユーゴスラヴィア委員会が結成され、セルビア政府と南スラヴ統一国家の建設をめぐる交渉に入ったことなどである。⑨との関連では、セルビア首相のニコラ・パシッチの名前も登場している。なお、シュコルスカ・クニガの場合、南スラヴ統一国家としてのセルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国の成立過程については、小学校八年生向けの教科書

の冒頭で取り扱うこととされており（この学年には二〇一九年に採択された新たなカリキュラムが適用されていないため、二〇二〇年現在も旧来の教科書が使用されている）、一九一七年にユーゴスラヴィア委員会とパシッチらセルビア政府代表が南スラヴ統一国家の建設で合意したコルフ宣言等については、そもそも小学校七年生向けの教科書には含まれていなかった。

一方、クロアチア国内のセルビア人についても、⑩クロアチア最大の少数民族はセルビア人であり、彼らの国民意識の発達にはイリア運動も寄与していたこと、⑪ハンガリー化を進めようとするクエン＝ヘーデルヴァーリ総督の下でクロアチア人とセルビア人の対立が助長されたこと、⑫一九〇五年にクロアチアで多くの政党が参加してクロアチア人・セルビア人連合が組織されたことにも触れられていた。

むしろ、クロアチアがユーゴスラヴィアの一部であった一九八〇年代までの歴史教科書に比べれば、近隣諸国・諸民族に関する記述が大幅に削減されたことは事実だが、まだこれだけ残されていたと解釈することもできる。というのも、これらの記述の多くが、二〇二〇年から導入されている新たな教科書では削除されているからである。

4. 歴史教科書における地域史的視点 (2)

シュコルスカ・クニガ刊行の二〇一九年までの小学校七年生向け

の歴史教科書と二〇二〇年のものを比較すると、⑤、⑧、⑨は維持されているものの、それ以外は見当たらない。この教科書で新たに加わった事項は、⑬イヴァン・マジユニチ総督時代の学校制度改革で学校が教会から国家に移管された際、正教会の聖職者が「セルビア性 (srpsivo) に対する攻撃」として激しく抵抗したことだけである。二〇〇六年の「クロアチア国民教育基準」と呼ばれる旧カリキュラムでは小学校七年生の学習内容としてクロアチア国外のクロアチア人やクロアチア国内のその他の民族（セルビア人、イタリア人など）のナショナル・アイデンティティの形成が例示されており、実際に⑩のような項目が教科書に設けられていたが、新たなカリキュラムではそうした例示が無くなったことも影響していると考えられる。新たなカリキュラムにおいて旧ユーゴスラヴィア諸国・諸民族が登場するのは、クロアチアがユーゴスラヴィアの一部であった時代（一九一八年～一九九一年）と一九九〇年代のユーゴスラヴィア紛争（「大セルビア主義的侵略行為」という項目が維持されている）を含む小学校八年生を別にすれば、小学校六年生向けの内容に中世ボスニア国家が含まれている程度である。

こうした背景もあって、クロアチアの歴史教科書におけるクロアチア国内のセルビア人に関する記述よりもセルビアの歴史教科書における記述のほうがはるかに詳しい。一方では、各教科書には随所に「クロアチア、スラヴォニア、ダルマチアにおけるセルビア人」といった項目があるものの、クロアチア史の概要をほとんど示すことなく、そこでのセルビア人の動向だけを詳しく描いていることも

事実である。そうした中で、ノヴィ・ロゴスの教科書は一九世紀後半までのクロアチア史の概要を掲載し、イリリア運動に対するヴーク・カラジッチの影響やクロアチアの独立を主張するアンテ・スタルチェヴィチの構想などに触れつつ、オスマン帝国とハプスブルク帝国の双方に抵抗した一七世紀後半のクロアチア総督ベタル・ズリンスキの肖像画と一八四八年革命期のクロアチア総督ヨシブ・イエラチチの肖像画を掲載しているが、これはむしろ例外といえる。

クロアチアの小学校七年生向けの歴史教科書を話を戻すと、シュコルスカ・クニガの教科書に限って言えば、セルビアおよびセルビア人に批判的・対立的であると思われる記述は見られない一方、クロアチアおよびクロアチア人との共通の歴史としての側面はほとんど看取できない。他の旧ユーゴスラヴィア諸国・諸民族あるいは南東欧諸国で起こった出来事も、日本における「世界史」と同じように、国際関係上の重要事項だけがほとんどクロアチア史と関連づけられることなく描かれている。

これほど極端ではないにせよ、こうした傾向はアルカ・スクリプトの教科書にも見られ、①～④、⑬は登場しない。しかし、⑤から⑨の国際情勢に関する部分は比較的詳しく描かれており、⑭第一次世界戦中のセルビアの動向（一九一四年のツェルの戦いとコルバルの戦い、一九一五年のコルフ島への退却と本土占領、一九一六年のテッサロニキ戦線への参加など）に関する記述もある。クロアチア国内のセルビア人については⑩～⑫に関する記述があるほか（⑩に関しては若干ニュアンスが異なる）、⑮一八六一年のクロアチア議

会にはスリイェム、東スラヴォニア、軍政国境地帯のセルビア人も参加し、セルビア人とクロアチア人の同権、セルビア語・キリル文字の使用を要求したについても言及している。⁽⁴⁸⁾

プロフィール・クレットの教科書でもセルビアおよびセルビア人に関する記述は簡略化されているが、二〇一九年までの教科書と同じ事項をほぼ引き継いでいる。⁽⁴⁹⁾①と②に関する記述はあるものの、セルビア蜂起の指導者は説明はおろか人名さえ登場せず、旧版にあったオブレノヴィチの肖像も削除されている一方、③のガラシヤニンだけはコラムで写真つきで詳しく紹介されている。⁽⁵⁰⁾⑤⑥⑨と⑭に関する記述、⑪と⑫に関する記述もある。⁽⁵¹⁾

続いて、地域史的視点が反映されやすいものとして、ユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国時代にはユーゴスラヴィア統一運動の先駆的な位置づけがなされていた一八三〇年代から四〇年代にかけての「クロアチア民族再生―イリリア運動」に関する各教科書の具体的な記述について検討する。

一九八〇年代の教科書には「イリリア運動はクロアチア人だけの民族運動にとどまった」と運動の限界を指摘する一方、「イリリア理念はクロアチア国外にも広まっていた。イリリア主義者はクロアチア、スラヴォニア、ダルマチア、そしてヴォイヴォディナのセルビア人の間で賛同者を得た。モンテネグロのニエゴシユ公は南スラヴ諸民族の近親性という考えを称賛した。スロヴェニア人の間でもイリリア運動に賛同する者があり、なかでももっとも有名なのがスタンコ・ヴラズである」とも述べている。⁽⁵²⁾しかし、すでに一九九

〇年代の教科書では「イリリア運動はクロアチア人だけの民族運動にとどまった」という記述が残される一方、セルビア人やモンテネグロ人との関わりについてはまったく触れられず、スロヴェニア人のヴラズの事例だけが残された。⁽⁵³⁾二〇〇〇年代になると、各教科書ではイリリア運動に関する記述は多様化した⁽⁵⁴⁾が、クロアチア人の民族運動としての側面を除けば、ヴラズの事例を取り上げる⁽⁵⁵⁾か、クロアチア国内のセルビア人に対する影響に触れる程度となった。⁽⁵⁶⁾そして二〇二〇年刊行の新たな教科書でも、詩人であるヴラズ（スロヴェニア系）とブレラドヴィチ（セルビア系）が民族再生に賛同し、クロアチア国民理念を受け容れたと述べるもの（アルカ・スクリプト）、イリリア運動の南スラヴの側面について他の文献資料を引用して紹介しているだけのもの（プロフィール・クレット）、他の南スラヴ諸民族との関わりよりもイリリア運動の指導者リュデヴィト・ガイがロシア皇帝ニコライ一世にスラヴ諸民族統一の期待を寄せていたことを強調するもの（シユコルカ・クニガ）など、いつそう多様化しているが、南スラヴ統一運動と直接関連づけ、肯定的に評価しているものはない。⁽⁵⁷⁾

なお、クロアチア人以外の旧ユーゴスラヴィア諸民族で、現在まで小学校七年生向けの歴史教科書に残っている人物はごく僅かに過ぎず、すべての教科書に肖像（または銅像）とともに掲載されているのは科学・技術分野の世界史的文脈で登場するニコラ・テスラがほとんど唯一の例外となっている。⁽⁵⁸⁾興味深いことに、テスラに関してはセルビアの教科書でも写真とともに掲載されている。⁽⁵⁹⁾サライエ

ヴォオ事件に関しては、この事件を報道した新聞の暗殺現場のイラストを掲載しているものはあるが、実行犯のガヴリロ・プリンツィプの写真は無くなっている。セルビアの教科書にはプリンツィプの写真が必ず掲載されているとは対照的である。クロアチア人の「隣人」であるスロヴェニア人、ボスニア・ムスリム、モンテネグロ人などに至っては、まったく取り上げられてもいない。もともと、セルビアの教科書にしても、クロアチアを含むセルビアの近隣諸国におけるセルビア人の歴史を描いてはいるものの、クロアチア史そのものを描くことはなく、イリリア運動でさえもほとんど取り上げられていない。むしろ、ボスニア・ヘルツェゴヴィナとモンテネグロの教科書には、イリリア運動や南スラヴ統一構想に関する記述があり、リュデヴィト・ガイ、ヤンコ・ドラシコヴィチ、ヨシプ・イェラチチ、ヨシプ・ユライ・シュトロスマイエルらの肖像画が掲載されている。いずれにせよ、これらと比べても、クロアチアの教科書が旧ユーゴスラヴィア諸国・諸民族に対する地域史的視点を欠いたものとなっていることは明らかである。

むすびにかえて

本稿では、クロアチアで二〇二〇年に刊行された新たな小学校七年生向けの歴史教科書の記述をそれ以前のものと比較しつつ、それらに取り入れられている地域史的視点を分析してきた。その結果、クロアチアの現行教科書の内容は一九九〇年代のものとは比べて旧

ユーゴスラヴィア諸民族、とりわけセルビアないしセルビア人に敵対的であるとはまでは言えないものの、依然としてセルビアがほとんど「大セルビア主義」の文脈でしか登場しないこと、それ以外の場合にはクロアチア人以外の旧ユーゴスラヴィア諸民族の歴史はほとんど無視されていることが確認された。かつて問題視されたセルビア人をはじめとする近隣諸民族との対立を助長するような記述はほとんど残されていないように見えるが、「クロアチア中心主義史観」を相対化しうる地域史的視点が取り入れられているわけでもない。新たなカリキュラムが目指すクロアチア史、ヨーロッパ史、世界史の文脈で学ぶことが現在のように断片的ではない形で実現されれば、旧ユーゴスラヴィア諸国・諸民族を基盤とする南東欧地域史を描くことは必須ではないのかも知れない。しかし、現時点では個々の歴史教科書においては、クロアチア史、ヨーロッパ史、世界史の関連づけは十分ではなく、「クロアチア中心主義史観」が払拭されているとも言いがたい。このことは、二〇二一年に刊行予定の小学校八年生向けおよび中学校四年生向けの歴史教科書に、より顕著にあらわれることが考えられる。ユーゴスラヴィア紛争が勃発してから三〇年にもなるが、当事者であった地域住民の和解ができてくるのかは世論調査の結果などを見ると疑わしい面もある。その意味でも、歴史教科書における地域史的視点的分析を継続的に行い、それを住民の和解へと結びつける方法について検討を続けることが必要であろう。

注

(1) スニエジャナ・コレン「教科書の中の地域史—クロアチアの事例—」、柴宜弘編『バルカン史と歴史教育—「地域史」とアイデンティティの再構築』明石書店、二〇〇八年、二〇一—二〇三頁等を参照。

(2) クロアチアでは一九八〇年代末にクロアチア民主同盟(HDZ)を結党し、独立後のクロアチア初代大統領となったフランヨ・トゥジマンが一九九〇年一月に逝去した。一九九〇年四月に実施された第二次世界大戦後初の複数政党制に基づくクロアチア議会選挙で地滑りの勝利を収めてから一九九二年八月の総選挙、一九九五年一月の総選挙でも第一党の地位を維持してきたHDZは、二〇〇〇年一月の総選挙では社会民主党(SDP)を主力とする中道左派連合に大敗し、その直後に実施された大統領選挙でもHDZの後継候補は得票数三位にとどまり、決選投票にさえ進めなかった。一方、セルビアでは社会主義時代からセルビア共産主義者同盟議長として実権をふるっていたスロボダン・ミロシェヴィチが一九九一年からセルビア大統領、一九九七年からはモンテネグロと結成していたユーゴスラヴィア連邦共和国大統領となり、彼を党首とするセルビア社会党(SPS)は一九九〇年代の四回のセルビア議会選挙および三回のユーゴスラヴィア連邦議会選挙で第一党の地位を維持していた。しかし、二〇〇〇年九月のユーゴスラヴィア連邦議会選挙および初めに公選制となった連邦大統領選挙でセルビア民主野党連合に敗れ、しかもその結果を認めなかったため「ブルド―ザー革命」と呼ばれる大規模な抗議行動まで起こった。SPSは同年二月のセルビア議会選挙でも敗れて、初めて下野している。一九九〇年代以降の旧ユーゴスラヴィア諸国(ユーゴスラヴィア後継諸国)の歴史については、月村太郎編『解体後のユーゴスラヴィア』晃洋書房、二〇一七年等を参照。

(3) ユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国時代、各共和国・自治州ごとの国定教科書が刊行されていた。クロアチアではシユコルスカ・クニガがほとんど

唯一の教科書出版社であったが、これと同じ役割を担うものとして、スロヴェニアにスロヴェニア国立出版局(Državna založba Slovenije)・セルビアに教科書・教材局(Zavod za udžbenike i nastavna sredstva)・ボスニア・ヘルツェゴヴィナにスワイエトロスト(Svijetlost)・マケドニアにプロスヴェトノ・デロ(Prosvetno delo)・モンテネグロに共和国教育開発局(Republički zavod za unapređivanje vaspitanja i obrazovanja)が存在した。これらのうち、モンテネグロおよびボスニア・ヘルツェゴヴィナのスルプスカ共和国では歴史教科書は国定教科書のままであるが、それ以外の多くの国々では一九九〇年代から二〇〇〇年代にかけて教科書が認可制となって複数の出版社が歴史教科書を刊行している。石田信一「東ヨーロッパ諸国における学校教育制度と歴史教育の現状—旧ユーゴスラヴィア諸国を中心に—」、『跡見学園女子大学文学部紀要』第四七号、二〇二二年、一—一四頁等を参照。

(4) こうした試みに関しては、石田信一「ユーゴスラヴィア紛争と歴史教育から見た和解の試み」、『跡見学園女子大学文学部紀要』第五三三号、二〇一八年、一—一七頁等を参照。もっとも重要な多国間の取り組みとして、ギリシア・テッサロニキのNGO「南東欧の民主主義と和解のためのセンター」(CDR SEE)が推進してきた「共同歴史プロジェクト」があり、シンポジウムや研修会の開催、論文集や資料集(副教材)の刊行など、さまざまな成果をあげている。その一つであるクリステイナ・クルリ総括責任「バルカンの歴史—バルカン近代史の共通教材」(明石書店、二〇一三年)の巻末にある「監訳者解説」(柴宜弘、五三七—五四五頁)は、こうした取り組みに対する批判等の存在を含めて、非常に参考になる。CDR SEEのプロジェクトに関しては、クリステイナ・クルリ「分断された地域の共通の過去—バルカンの歴史を教えること—」、柴宜弘編『バルカン史と歴史教育』一〇五—一九頁等を参照。

(5) この新たなカリキュラムをめぐる問題については、石田信一「クロアチアにおけるカリキュラムの変遷と歴史教育の諸問題」、『跡見学園女子大学文学

部紀要』第五五号、二〇二〇年、一〜一八頁等を参照。

- (6) 石田信一「クロアチアにおける歴史教育と近代史」、『跡見学園女子大学文学部紀要』第四五号、二〇一〇年、一〜一八頁、石田信一「国民史を超える試み―旧ユーゴスラヴィア諸国の歴史教科書にみる地域史」、柴宜弘・木村真・奥彩子編『東欧地域研究の現在』山川出版社、二〇二二年、二八六〜三〇四頁等を参照。

(7) コレン「教科書の中の地域史」二二八頁。

- (8) 本研究課題の着想は、JSPS科研費・基盤研究B（研究課題「バルカン諸国の歴史教育から見た紛争と和解の研究」(15K170046) から得ている。また、その成果は、前掲論文「ユーゴスラヴィア紛争と歴史教育から見た和解の試み」(「クロアチアにおけるカリキュラムの変遷と歴史教育の諸問題」)等として発表している。

(9) Odluka o donošenju kurikuluma za nastavni predmet Povijest za osnovne škole i gimnazije u Republici Hrvatskoj, *Narodne novine*, 27/2019 (20.3.2019).

- (10) Katalog odobrenih udžbenika za šk. god. 2020./2021., OSNOVNA ŠKOLA, Zagreb: Ministarstvo znanosti i obrazovanja, 2020; Katalog odobrenih udžbenika za šk. god. 2020./2021., GIMNAZIJE, Zagreb: Ministarstvo znanosti i obrazovanja, 2020. (1) 1) ユーロ・シムコルスカ・クニガ (Kresimir Erdelja, Igor Stojaković, *Klio 7: udžbenik povijesti u sedmom razredu osnovne škole*, Zagreb: Školska knjiga, 2020; Igor Artić, Dijana Muskaradin, Ivan Santica, *Trgovci 3: udžbenik povijesti u trećem razredu gimnazije*, Zagreb: Školska knjiga, 2020) 2) フロニール・クレット (Igor Despot, Gordana Frol, Miljenko Hajdarović, *Vremeplov 7: udžbenik povijesti za sedmi razred*, Zagreb: Profili Klett, 2020; Anita Budor Despot, Igor Despot, *Zašto je povijest važna? 3: udžbenik povijesti za treći razred gimnazije*, Zagreb: Profili Klett, 2020) 3) アルカ・スクリプト (Dinko Benčić, Lijana Horst, *Moja Povijest 7: udžbenik za 7. razred osnovne škole*, Zagreb: Alka script, 2020) 4) メリディヤキ (Vjera Brković,

Rona Bašljeta, Hrvoje Perić, Filip Šimešin Šegvić, Nikola Šimešin Šegvić, Mladen Tomorad, *Povijest 3, Svijet prije nas: udžbenik komplek za povijest u trećem razredu gimnazije*, Zagreb: Mendijani, 2020) のものを参照する。

- (11) これら二名の執筆者にイヴァン・トゥキッチを加えた三名でシムコルスカ・クニガから二〇〇〇年に刊行された教科書 (Ivan Dukić, Kresimir Erdelja, Igor Stojaković, *Povijest 7: udžbenik za sedmi razred osnovne škole*, Zagreb: Školska knjiga, 2000) に由来し、*めいよう長命のめいようじやう* の教科書のタイトルは二〇〇七年 (Tragom prošlosti 7: udžbenik povijesti za sedmi razred osnovne škole) 二〇一四年 (Tragom prošlosti 7: udžbenik povijesti u sedmom razredu osnovne škole) 二〇二〇年 (Klio 7: udžbenik povijesti u sedmom razredu osnovne škole) と微妙に変化している。

(12) 福井憲彦ほか『世界史B』東京書籍、二〇一七年、三四八〜三五二頁。

(13) *Trgovci 3*, pp.197-224.

(14) Ivan Vujčić, *Povijest: Hrvatska i svijet u XX. stoljeću. Udžbenik za četvrti razred gimnazije*, Zagreb: Brotnjanka, 1998, pp.32-49.

(15) Neven Budak, “Post-socialist Historiography in Croatia since 1990,” Ulf Brunnbauer, ed., (Re)Writing History: *Historiography in Southeast Europe after Socialism*, Münster: LIT Verlag, 2004, pp.158-163. (1) の論文によれば、一九九〇年代後半に刊行された近代史・現代史に関する教科書が取り扱っているトピックは、平均して政治史六四%、軍事史一八%、文化・社会・経済史一七%、またクロアチア史五八%、地域史三%、世界史三七%となっている(合計が一〇〇%ではない)。

(16) 石田信一「クロアチアにおける歴史教育と近代史」一三〜一四頁。

(17) フロニール・クレットの小学校七年生向け歴史教科書では、政治史四〇%、社会史一七%、哲学・宗教・文化史一一%、経済史一〇%、科学・技術史一〇%、選択テーマ一%となっている。また、直接クロアチア史に関わる章

- (世界史とクロアチア史が融合している章を除く)の比率はプロフィール・レットが三四%、シュコルスカ・クニガが三六%、アルカ・スクリプトが三三%で、大きな違いはない。
- (18) 石田信一「旧ユーゴスラヴィア諸国における歴史認識の変化—南スラヴ理念の系譜に関する記述をめぐって—」『跡見学園女子大学文学部紀要』第四九号、二〇一四年、二二—三三頁。
- (19) Dragutin Pavličević, Rene Lovrenčić, Čovjek u svom vremenu 3: *Izložbenik povijesti za VII. razred osnovne škole*, III. izdanje, Zagreb: Školska knjiga, 1988, pp.188-193.
- (20) Čovjek u svom vremenu 3, pp.194-199.
- (21) Filip Potrebica, Dragutin Pavličević, *Povijest za VII. razred osnovne škole*, 3. izdanje, Zagreb: Alfa, 1998, p.58.
- (22) *Povijest za VII. razred* (1998), pp.60-65.
- (23) *Povijest za VII. razred* (1998), pp.105-106.
- (24) ロマン「教科書の中の地域史」一一三三頁。
- (25) *Tragom prošlosti 7* (2007), p.121.
- (26) *Tragom prošlosti 7* (2007), p.74; *Tragom prošlosti 7* (2014), p.67.
- (27) *Tragom prošlosti 7* (2007), p.74; *Tragom prošlosti 7* (2014), p.67.
- (28) *Tragom prošlosti 7* (2007), p.74; *Tragom prošlosti 7* (2014), p.67.
- (29) *Tragom prošlosti 7* (2007), p.91; *Tragom prošlosti 7* (2014), p.83.
- (30) *Tragom prošlosti 7* (2007), pp.134-135; *Tragom prošlosti 7* (2014), p.126.
- (31) *Tragom prošlosti 7* (2007), p.197; *Tragom prošlosti 7* (2014), p.181.
- (32) *Tragom prošlosti 7* (2007), pp.198-199; *Tragom prošlosti 7* (2014), pp.182-183.
- (33) *Tragom prošlosti 7* (2007), p.200; *Tragom prošlosti 7* (2014), p.184.
- (34) *Tragom prošlosti 7* (2007), pp.211-212; *Tragom prošlosti 7* (2014), pp.196-197.
- (35) *Tragom prošlosti 7* (2007), p.212; *Tragom prošlosti 7* (2014), p.197.
- (36) Kresimir Erdelja, Igor Stojaković, *Tragom prošlosti 8: Izložbenik povijesti za osmi razred osnovne škole*, Zagreb: Školska knjiga, 2007, pp.70-71; Kresimir Erdelja, Igor Stojaković, *Tragom prošlosti 8: Izložbenik povijesti u osmom razredu osnovne škole*, Zagreb: Školska knjiga, 2014, p.65. なお、二〇〇六年までのシュコルスカ・クニガの小学校七年生向けの教科書(二〇〇〇年初版)では、コルフ宣言の詳しく背景を説明が掲載されていた。Ivan Dukić, Kresimir Erdelja, Igor Stojaković, *Povijest 7: Izložbenik za sedmi razred osnovne škole*, VII. izmijenjeno i dopunjeno izdanje, Zagreb: Školska knjiga, 2006, p.139.
- (37) *Tragom prošlosti 7* (2007), p.91; *Tragom prošlosti 7* (2014), p.83.
- (38) *Tragom prošlosti 7* (2007), pp.156-157; *Tragom prošlosti 7* (2014), p.144.
- (39) *Tragom prošlosti 7* (2007), pp.160-161; *Tragom prošlosti 7* (2014), p.147.
- (40) *Klio 7*, pp.152-153, 155-157, 168-169.
- (41) *Klio 7*, p.138.
- (42) *Nastavni plan i program za osnovnu školu*, Zagreb: Ministarstvo znanosti, obrazovanja i sporta, 2006, p.288.
- (43) Челопир Анрић, Мања Мининовћ, *Историја 7: учебник са одобреним ипотујским изворима за седми разред основне школе*, Београд: Нови Логос, 2020, с.173-174.
- (44) 日本の中学校向け歴史教科書でもサライエヴォ事件だけは取り上げられてゐる(『新しい歴史』東京書籍、二〇一四年、一八五頁)。また、高校向け歴史教科書(前掲『世界史B』)では簡潔ながら①と⑤と⑧に関する記述がある(二八四、二九四―二九五、三一九―三二〇、三四八―三四九頁)。
- (45) *Moja Povijest 7*, pp.70-71, 135-138, 153-155.
- (46) *Moja Povijest 7*, p.141.
- (47) *Moja Povijest 7*, pp.54, 125, 131.
- (48) *Moja Povijest 7*, p.116.

- (94) Damir Agičić, *Utemerlov 7: izdbenik ročjesta za sedmi razred osnovne škole*, Zagreb: Profil, 2014, p.83; *Utemerlov 7 (2020)*, pp.93-94.
- (95) *Utemerlov 7 (2014)*, pp.82-83, 122-127, 187-188, 190-193, 199-200; *Utemerlov 7 (2020)*, pp.94-98, 156, 159, 164, 178-179.
- (16) *Utemerlov 7 (2014)*, pp.175, 179-180; *Utemerlov 7 (2020)*, pp.108-109, 114.
- (92) *Čovjek u svom učemenu 3*, pp.59, 190.
- (93) *Ročjest za VII. razred (1998)*, p.43.
- (15) Stjepan Bekavac, Sinisa Kljajić, *Ročjest 7: izdbenik za 7. razred osnovne škole*, Zagreb: Alfa, 2009, p.73.
- (15) *Tragom prošlosti 7 (2007)*, p.91; Damir Agičić, *Ročjest 7. Učbenik za sedmi razred osnovne škole*, Zagreb: Profil International, 2007, p.53.
- (95) *Moja Ročjest 7*, p.54; *Utemerlov 7 (2020)*, p.70; *Klio 7*, p.64.
- (15) *Klio 7*, p.96; *Utemerlov 7 (2020)*, p.40; *Moja ročjest 7*, pp.89, 90, 116-118; *ほんまの字真の掲載レベルの教科書と48歳 (Utemerlov 7 (2020), p.94)*。
- (95) Mилош Омрчен, Невена Грбовић, *Историја 7, уџбеник са одобраним историјским изворима за седми разред основне школе*, Београд: Едука, 2020, с.158; Сузана Рајић, Данко Леовац, *Историја, Уџбеник са одобраним историјским изворима за седми разред основне школе*, Београд: Фреска, 2020, с.181; Мирослав Филиповић, *Историја 7, уџбеник са одобраним историјским изворима за 7. разред основне школе*, Београд: Дата статус, 2020, с.160; Урош Миливојевић, Весна Лучић, Зоран Павловић, *Историја 7, уџбеник са одобраним историјским изворима за седми разред основне школе*, Београд: БИП3 школство, 2020, с.90; Александар Раствојић, Предрат М. Ђајидић, Бранка Бечановић, Бједна Лазаревић, *Историја, уџбеник са одобраним историјским изворима за седми разред основне школе*, Београд: Групац/ИДУМ, 2020, с.118; Драгомир Бонџић, Коста Николић, *Историја, уџбеник са одобраним историјским изворима за седми разред основне школе*, Београд: Завод за уџбенике, 2020, с.116; Радмир Д. Поповић, Емина Жуваковић, Ђилана Неловић, Александар Тодосијевић, Сава Петровић Тодосијевић, *Историја 7, уџбеник са одобраним историјским изворима за седми разред основне школе*, Београд: Клет, 2020, с.161; Чедомир Антић, Мана Миливојевић, *Историја 7, уџбеник са одобраним историјским изворима за седми разред основне школе*, Београд: Нови Логос, 2020, с.116; Весна Димитријевић, *Историја 7, уџбеник са одобраним историјским изворима за седми разред основне школе*, Београд: Вулкан знање, 2020, с.133.
- (95) *Klio 7*, p.156; *Moja Ročjest 7*, p.138, 110-119; *ほんまの字真の掲載レベルの教科書とは、ほんまの字真の写りが掲載された。* *Tragom prošlosti 7 (2014)*, p.184.
- (99) *Историја 7 (Едука, 2020)*, с.190; *Историја (Фреска, 2020)*, с.181; *Историја 7 (Дата статус, 2020)*, с.184; *Историја 7 (БИП3, 2020)*, с.229; *Историја (Групац/ИДУМ, 2020)*, с.182; *Историја (Завод за уџбенике, 2020)*, с.172; *Историја 7 (Клет, 2020)*, с.197; *Историја 7 (Нови Логос, 2020)*, с.213; *Историја 7 (Вулкан знање, 2020)*, с.201.
- (19) 前述の通り、ノヴィ・ロブスの教科書ではイリリア運動が取り上げられていないものの、その指導者であるリュネテヴィト・ガイの名前が登場しない。*Историја 7 (Нови Логос, 2020)*, с.174. また、ウルカン・スナニエの教科書は文化史におけるロマン主義の潮流の文脈で、「最も有名なスラヴ諸民族の民族再生の代表者は、セルビア人ではヴーク・カラジッチ、スロヴァキア人ではパウエル・シャファールィク、スロヴェニア人ではフランツェ・プレシエレン、クロアチアではリュネテヴィト・ガイである」と紹介し、その全員の肖像画まで掲載されている。*Историја 7 (Вулкан знање, 2020)*, с.108.
- (92) Leonard Valenta, *Historija – Ročjest za 8. razred četveroljetnog osnovne škole*, Sarajevo: Dječija knjiga, Bosanska gijč, 2011, pp.52-56; Izet Šabotić, Mirza Čelajić,

Historija 8: udžbenik za osmi razred devetogodišnje osnovne škole, Tuzla-Zemican: NAM, Vijeće, 2011, pp.49-50; Asmir Hasčić, *Historija: udžbenik za osmi razred devetogodišnje osnovne škole*, Sarajevo: Sarajevo Publishing, 2011, pp.50-51, 54-57; Azetina Muminović, Salet Muminović, *Historija za 8. razred devetogodišnje osnovne škole*, Sarajevo: Svjetlost, 2011, pp.57-58; Жељко Вујадиновић, Славица Курпешанин, Гордана Напрадић, *Историја за 8. разред основне школе*, Источно Сарајево: Завод за уџбенике и наставна средства, 2010, с.172, 174; Живко М. Андријашевић, Санг Шабогвић, Драгутин Паповић, Слободан Дробњак, *Историја за осми разред основне школе, уџбеник*, Полицрица: Завод за уџбенике и наставна средства, 2018, с.73-74.

(63) 二〇一九年にクロアチアで実施された世論調査では、回答者のうちセルビアのEU加盟に賛成する者は三三%に過ぎず、反対する者の四五%を大きく下回るなど友好的ではない面が窺える。他の旧ユーゴスラヴィア諸国のEU加盟に関しては、北マケドニア六七%、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ六二%、モンテネグロ五七%、コソヴォ五三%といずれも賛成する者が過半数を占めたとは対照的であった。Irsos, *Svijest gradana o Evropskoj uniji, te stavovi o ulazi RH u predsjedništvo*, 10. prosinca 2019. [https://crosol.hr/wp-content/uploads/2020/01/Irsos_Crosol_Predsjedanje-RH-EU-1.pdf] 54頁。二〇二〇年にセルビアで実施された世論調査では、セルビアの最大の敵国は「何」かという問いに対して、クロアチアが第一位(三〇%)という結果となっている。BCSR, *Map: Faces of Serbian Foreign Policy: Public Opinion and Geopolitical Balancing*, November 2020. [https://bezbednost.org/wp-content/uploads/2020/11/MANY-FACES-OF-SERBIAN-FOREIGN-POLICY.pdf] (5頁以下。二〇二一年一月一日閲覧)